

【霧隠れ三郎太 “霞の術”】

作…永妻 晃

舞台中央に二人の男女が立つ。

霧隠三郎太（〇〇歳）と歳若き娘、小袖（〇〇歳）である。

小袖「えい！」

小袖、拳を三郎太に突き出す。

三郎太「ぬッ」

その拳を素早くひねり小袖を突き放す。

小袖、身を翻すや、十字手裏剣を投げ打つ。

三郎太、十字手裏剣をすべてかわす。

三郎太「小袖、しかと相手を見据えて十字手裏剣を撃て」

小袖、急に身体を萎え、

「……あああ〜」

三郎太「どうした!?!」

小袖「小袖はもう疲れ果てました」

三郎太「何だ、そのザマは！ 小袖ッ、お前は常々日本一の女忍者“くの”に成りたいと申しておったではないか！ これしきの修行で根を上げるとは情けない！ 陽の出から陽が落ちるまで、サンライズ、サンセット」

小袖「サンライズ？」

三郎太「サンセット、異国語じゃ……忍者は如何なる国の依頼を受けるやもしれぬ」

小袖「何と見上げた屋根屋の……」

三郎太「これ、その先を女が口にするものではない！ 努力をせぬ者は“屋根屋のフンドシ”にも劣る。“伊賀の郷”から立ち去れ！」

小袖「いえ、この小袖に伊賀の郷を立ち去ることなどありえませぬ！」

三郎太「ならば、参れ！」

小袖、黙して塑像のように動かなくなる。

三郎太「……どうした小袖！」

小袖、ニガイ薬でも呑んだような顔になり、

「ッ！」

三郎太『『ッ』!?!』

小袖「はい。小袖、今朝こんちよう日の出いだてんより、韋駄天じてんの如くけもの道みちを走り、

山やまをよじ、川かわを下り、仕掛け谷だにを渡り、磯沼いそぬまにては水遁すいどん、水蜘蛛みずぐも

の術、今また休む暇いまも無く、手裏剣てまりけんの稽古……」

三郎太「やはり、修行が苦か？」

小袖「いえ！」

三郎太「ならば、何故なにわしに立ち向むかわん、臆おそしたか！」

小袖「……ッ！」

三郎太「だから何だ『ッ』とは？」

小袖「ッ、ッ！」

三郎太『『ッ、ッ』!?!』

小袖「(痛いたそうに) ツツ、タ……」

三郎太「なに？」

小袖「ツツタの」

三郎太「ああ？」

小袖「足あしが攣つつたのよ！」

三郎太「あくあ、『攣つつたの』。(怒いかる) 小袖ッ、お前の望のぞみは何なにと？」

小袖「わが母美佐江みさえに負けぬ“くの一”に成なる事」

三郎太「その有様ありさまで、出来るかな！」

小袖「必ず、わたしには幼い頃こころから心に誓ちかつた悲願かなしみが！」

三郎太「その腕うででは……母の仇かたきを討うつことは出来できん！」

小袖「いつの日にか……」

三郎太「まあよいわ……足あしを見せてみる……攣つつた足あしはな

と、小袖の前に屈かむ、

小袖「隙あり、えーい!!」

と、三郎太の脳天に懐に隠したあつた薪を振り下ろすが、三郎太……、

「ほい、ほい、ほい」

三郎太、小袖の薪を難なくかわし、

「小袖、その手は喰わぬぞ」

小袖「……さすが、忍び頭の右腕と言われた三郎太」

三郎太「おい、いくら幼馴染とはいえ『三郎太』はないだろう。今は、

お前に忍びの手ほどきをしている俺だ、三郎太さまと言わぬか」

小袖『やま』？ お前をか？』

三郎太『お前』ではない、先生じゃ、いや、お師匠さまと呼びなさい

な」

小袖「お塩さま」

三郎太「塩ではない！ 塩分控えめ」

小袖「和尚さま」

三郎太「なに？」

小袖「山寺の……」

二人「オシヨサンは、ゴーン！」

三郎太「もうよい！ 今日はいままで、終わり、礼！」

と、立ち去ろうとする。

小袖「待って、お師匠さま！」

三郎太、にっこりと振り返り、

「……(優しく) 何だ？」

小袖「お師匠さまの“霧隠れの術” お見せ下さるなら、小袖、死に物狂いで頑張りまする」

三郎太「……」

小袖「(甘ったるく) おねがい」

三郎太「その甘ったるい言い方はよせ！」

小袖、威を正し、

「お師匠さまの秘術“霧隠れ霞の術”、お見せ下され！小袖、一生のお願いでござる。さすればどのような苦行にも耐えてみせまする！」

三郎太「……」

小袖、合掌して丁寧に頭を下げ、

「この通りです。天地神明に誓って！」

三郎太「……その言葉に嘘、偽りはないな！」

小袖「この小袖……『くの一忍者』のはしくれ、山寺の和尚さんに……

……」

三郎太「なにッ？」

小袖「いえ、天地よろずの神に誓って！」

三郎太「よし、承知。“霞の術”見せて進ぜよう！確と見てお

け!!」

小袖「はッ！」

三郎太「(かろやかに)『三郎太、懐より“霞の玉”を取り出すと

ポン！と床に叩きつけるや否や、一瞬にして、辺り一面、雲の

ごとく霧がかかり……三郎太の姿はボーツと見えなくなる』」

小袖「それ、台本の『ト書き』じゃないですか？」

三郎太「予算の関係じゃ、許せ！ボーツ」

三郎太、両手を広げ自分が霞の中に消えて行く仕草。

小袖「……これは、何としたことか、お師匠さまのお姿が？」

三郎太、あちらこちらと動き回り、小袖に声を掛ける。

三郎太『これ、小袖』

小袖「はいッ(と、きよろよろ)」

三郎太「小袖！」

小袖、目を丸くして辺りを窺う。

三郎太『どうだ、“霞の術”』

小袖「驚きました！」

三郎太『わたしが見えるか？』

小袖「見えませぬ……どこにおいでか？」

と、言いながらも三郎太を確り見据え、動き回る三郎太を追う。

三郎太『ちよつと待てー！ 何かわたしが見えてる様だぞ』

小袖「いえ、決して見えてはおりませぬ」

小袖、三郎太から視線をそらせ。

小袖「お師匠さま何処いずこに？」

三郎太「わざとらしい奴じや」

小袖「本当です。お師匠さまの声はすれど……」

三郎太『ならばよし！ このまま修行を続ける』

小袖「はい！」

三郎太、床から取りあげた木刀（紙製）をふあふあと泳がす様にして小袖に手渡す。

小袖「何と不思議、木太刀きだち（木刀が）が宙を舞って？」

三郎太「それ」

と、木刀を小袖に渡す。

三郎太「よいか、その木太刀で、（木刀）、わたしを打ち据すえられるか

……ほれ、こちらだ！」

三郎太、動き回り小袖に声をかける。

小袖、三郎太の声を目掛けて木刀を打ち降ろすが、そのたびに木刀は空を斬る。

その時、外で物音。

三郎太『気の抜けた感しで）な〜んだ、あの音は？』

三郎太の意識が外の物音にとらわれた時、

小袖「メーン！」

小袖の木刀が三郎太の脳天に打ち降ろされる。

三郎太『ウ・ヌッ、フヌフヌフヌフ……フヌ！』

三郎太、昏倒。

同時に、外より三人の忍者が飛び込んで来る。

小袖「何奴！」

一人の忍者……、

「えい！」

間、髪を容れず小袖のひ腹を突く。

小袖「ウッ」

気絶する、小袖。

忍者 A、B、小袖を倒した忍者に、

「お頭！」

お頭「うん、上手くいったの……（辺りを見まわし、部屋の外などを探り）どうやら霧隠れはいない様じゃ。ここはワシが、お前たちは奥を探せ！」

A、B 「はッ」

二人の忍者、別の部屋へ走り行く。

お頭、部屋の中の箆笥や小物入れ（無対象）などの中を探っている。

お頭「うん、ここでもない……ここでもない……一体どこに隠してあるのじゃ」

気絶している、三郎太が朦朧とした声を放つ、

『……あゝあ、頭が痛い、いったい何があつたのだろうね〜』

お頭「何だッ、今の声は？」

お頭、辺りを窺がうが、

「誰もいない……空耳か？」

二人の忍者、壺を抱え走り込んで来る。

お頭「おう、どうだった？」

忍者 A 「どこにも見当たりません」

三郎太『……（きつぱりと）秘密だもん！』

忍者 B 「おヤッ、誰か居るのでは？」



お頭 『仕掛け』？ おい、(Aに) 安兵衛、お前手を入れてみる」

忍者A 「わたくしが、ですか？」

お頭 「嫌か？」

忍者A 「はい！」

お頭 「嫌なものを無理強いはせぬ。それがワシの性格だ。(Bに) おい、太郎丸」

忍者B 「わたくしも怖いです。忍びの天才と言われている、霧隠れです。どの様な仕掛けが……手首がちよん切れるやも」

お頭 『手首がちよん切れる』？ (舌打ちをして、胸を張って) 意

気地のない奴めが、『手首がちよん切れる』か『ちよん切れぬか』  
試す度胸もないのか！

忍者B 「では、まずはお頭が……」

お頭 「おお、お前たちはワシの性格知ってるようだな」

忍者A 「ええ、頼まれたら『イヤ』と言えない質です」

お頭 「そう、『イヤ』と言えない質だ。(ニッコリ) 生まれつきだ！」

忍者B 「確か遺伝とか？」

お頭 「ああ、爺ちゃん譲りだ！」

忍者A、B 「お頭……お願い致します！」

お頭 「(明るく) あいよ！」

と、ためらわずに壺に手を入れる。

忍者A 「お頭、何かありますか？」

お頭、壺の中を漁っている。

お頭 「何か……あるぞ？ あ、これは何だ？」

忍者B 「何です!？」

お頭 「……何か……ヌルっとするな？」

忍者A 「嫌だな、出さないで下さいよ」

お頭 「おお、これは!？」

忍者B 「何です」

お頭 「ベタベタ……、あ、チクチク」



忍者A「お頭、もうやめましようよ」

お頭「お、これだ！」

お頭、壺の中から書状を出す。

お頭「あつた……幕府転覆を企てる密書だ！ 宛名は……（書状の

宛先の文字を読む）『よしこちゃん』」

忍者B「『よしこちゃん』？ 何です、『よしこちゃん』って？」

お頭「霧隠れの別名だ。さすが霧隠れ……良い名をつけおる」

お頭、書状の中をあらためるが、

「ウっ、中身が無い。霧隠れの奴どこに隠したというのだ？」

忍者A「こうなったら壁を崩してでも家探ししましょう！」

お頭「待て、あまり長居をすると霧隠れが戻って来るやもしれぬ」

お頭、小袖に眼が行く。

お頭「よし、この娘を人質に、密書と引き換えだ」

お頭、懐より矢立てやたを出しの密書の裏に、

「きりぎりす、ちりぎりす」

と、筆を走らせ、床に置く。

お頭「娘を連れて行け！」

忍者A、B「かしこまりました！」

一同、部屋から立ち去ろうとした時、

三郎太『またね』

一同、振り返り、辺りを窺がうが……。

三人「ううん、空耳か!？」

言い捨ててお頭と忍者A去る。

忍者B「……俺の好物は？」

と、腕組みして、

「甘いものか辛いものか？」

忍者B、ぶつぶつ言いながら去る。

三郎太、我に返り、

「……どうしたんだ、何があつたんだ？ ……ああ頭が痛い」



忍者A「お頭の匂いはどんなかってことですか？」

お頭「さっしがないな」

忍者A「(Bに) お前が言えよ」

忍者B「お前が言ってくれよ」

お頭「よし、聞かんでもいい、さっしはつくぜ……」

と、自分の匂いを嗅ぐが……。

お頭「自分じゃ解らねえもんな……うん、来るぜ、支度しろ！」

忍者A、B、抜刀！

小袖「……(もぐもぐと叫ぶ、以下猿轡内の声)『三郎太様、来ちゃ

駄目。わたしの命より使命を果たして下さい』」

お頭「何ッ、『三郎太様、来ちゃ駄目。わたしの命より使命を果たし

て下さい』だと」

忍者A「お頭、よく分かりますね」

お頭「ま、まあな(台本を読んで知っているような意味合い)、そんな

なところだろうと思ってるな！」

三郎太、現れる。

もちろん、一同には見えない。

三郎太『(独白) お前たちは忍者の風上にも置けぬ奴らだ。忍者同盟

連判状れんぱんじょうにおいて、伊賀の郷さとに許可なく先入するものあらば、こ

れを成敗するとの掟おきてがあるのを忘れたか……思い知らせてや

る！」

三郎太、三人に近づく。

お頭「……霧隠れはもう、この部屋に居るかも知れぬ。油断をする

な！」

三人、間隔を置いて身構える。

お頭「やい、霧隠れ……この娘と密書と引き換えだ。解ってるだろう

な！」

三郎太、お頭のお尻を蹴る。

お頭「痛てッ……そうか、これがお前の返事か！ 安兵衛、太郎丸、

娘を斬れ」

忍者 A.B 「……」

お頭 「どうした、お前ら？ 娘を斬れと言ってるのが聞こえぬのか！

出来ぬのか！ よし、ワシが斬り刻んでやる！」

お頭、小袖を斬ろうと刀を振りかぶる。

忍者 A.B 「お頭、斬っちゃ駄目！」

お頭 「明るく あいよ！ ……（舌打ちをして）お前らワシの性格

を逆手に取りやがって……じゃ、霧隠れを始末しろ！」

忍者 A.B 「承知！」

三郎太、一同の隙を見て小袖の縄を解く。

暫時……見えない三郎太と棍棒を手にした小袖と忍者

たちとの戦い。

いつしか霧が薄れて行く。

お頭 「おい、霧が消えて行くぞ……」

忍者 A 「あッ、お頭、霧隠れの姿が薄らと……」

忍者 B 「見えた、見えた！」

三郎太、何を思ったか、小袖の肩を両の手で掴むとくる

りと反転して逃げ去る。（三郎太と小袖が入れ替わった

のである）

お頭 「……霧隠れが逃げたぞ、追え!!」

忍者 A.B 「待てーッ」

忍者 A.B、三郎太を追う。

お頭、小袖に近づき、

「娘、見たか霧隠れの本性を、何とまあ情けない奴、臆病風に

吹かれ、逃げて行ったわ、はは、ははははははは」

小袖、いきなりお頭の頭上に棍棒を振り下ろす。

お頭 「ウヌッ、はははは……」

と、お頭、倒れかかる

小袖 「待て、倒れる前にワシの話を聞け！」

お頭「(素直に)はい」

小袖「わしは三郎太じゃ」

お頭「(素直に)嘘？」

小袖「ばかめ、これぞ変わり身の術。冥土めいどの土産に説明つきで見せてやっただ」

お頭「驚き！」

お頭、倒れかかる。

小袖「お礼は」

お頭「(素直に)ありがとう」

小袖「倒れてよし！」

お頭「では、(ピヨコっと、お辞儀をして)ウヌウヌウヌウヌ……」

お頭、ぐらぐらと崩れ落ちる。

小袖「成敗せいばい！」

三郎太(小袖)来る。

小袖「三郎太 おお、小袖が無事で何より」

三郎太(小袖)、いきなり小袖(三郎太)の胸い短刀を突き刺す。

小袖「三郎太 ウツ、小袖！」

三郎太「(小袖)お師匠様……隙あり！」

三郎太と小袖、くるりと反転。

三郎太「で、でかした小袖……母の仇かたき……討うちとつたり」

三郎太、倒れる。

小袖、じつと三郎太を見つめていたが、

「さぶろーたー！」

完

決定稿 2019.8.10.sat